

C. ガーヴェイ「プラン」概念の機能

—ごっこ遊びの理解をめぐる—

○鈴木八重子 戸田雅美
(東京家政大学大学院) (東京家政大学)

1. 研究目的

ごっこ遊びは多くの幼児期の子どもが熱心に取り組む遊びであり、この遊びは想像力や創造性、問題解決、認知、思考の発達と深く関連しあっており、重要な遊びとして認識されている。集団保育の場においてもごっこ遊びはよく行なわれている。また、あえて〜ごっこ、と名付けるまではないが子どもがイメージをもって物を見立てたり、何かの役になりきって遊ぶ姿は多くの場面で見られる。集団保育の場でのごっこ遊びにおける教師の援助はこの遊びを「見立て」や「役割」^{註1)}という視点から理解することによって行われることが多い。例えば、遊具や素材が何に見立てられているのかを理解し、ごっこ遊びを展開していく上で見立てやすい遊具や素材は何なのか、見立てがどのように一緒に遊んでいる仲間に伝わっていくのかを考えたり、誰が何の役になっているのか、その役にふさわしい行為をしているのか、またどうしたら幼児が役になりきれなのか、など「見立て」や「役割」という視点からごっこ遊びを捉え、教師の援助を考えるのである。

これに対しC.ガーヴェイ(1989)は、ごっこ遊びの主な構成要素として「プラン」と「役割」を挙げている。しかしガーヴェイの興味は遊び全体にわたっており「プラン」いう概念を出してはいるものの具体的には論じていない。しかし私はこの「プラン」概念はごっこ遊びを分析する際に有効なもの捉え着目した。ガーヴェイは、「プラン」とは「機能的役割を演じる配役によって経験され行われる、一連の出来事や動作から成り立っている」¹⁾と定義している。さらに「プラン」は「動作やできごとを一つの一貫したエピソードに組み立てるための青写真」²⁾となる特徴をもつ。これにより子どもたちは互いに確認しあわなくても遊びの中の動作やできごとを互いにスムーズに受け入れ合い一つの遊びを続けさせていくと考えられる。

本研究では幼児期の遊びとして重要な位置を占めるごっこ遊びを集団保育の場で捉えていく時に「プラン」概念がどのように必要なのか、また教師の援助を考えていく時の有効性を明らかにしていきたい。

2. 研究の方法

観察方法：都内公立幼稚園の教園で観察を行い、全部で30の事例を得ることができた。今回はその中の1事例を抽出して分析を行う。午前中の好きな遊びの時間に観察した。筆者が遊びを追って筆記記録し、もう一人がVTR記録をとった。(1時間18分)二つをあわせて一つの記録にまとめてその記録を分析した。

3. 事例分析

対象児：都内公立幼稚園3歳児クラス
全体が1時間18分の記録のうちの40分を事例として挙げた。以下、全体の記録の概要を示す。
記録「ピクニックごっこ」2002年11月
3年保育3歳児

R児はままごとコーナーで、おでんを作り弁当箱の中に入れる。教師にあげると教師は食べるふりをする。

そばにいたN児は、R児に「ピクニックに行こう」と声をかける。R児はリュックをもち、二人で保育室から玄関に行き、テラスのテーブルにつきまた、保育室に戻る、ということを3回繰り返す。その後、R児は遊びから離れてペープサートを作る。そのペープサートを手に教師が「ピクニックですか?いってらっしゃい」と声をかけると再びリュックを背負ってN児とピクニックごっこを始める。玄関で地図を見つけ、その後、R児が地図を書く。二人は地図を手にして出かけ、テラスの木の家をR児が「大型バス」に見立てて動物園に行くことにする(略)

以上の事例をもとに「プラン」の移り変わりの様子を表にした。

表の見方

- (1)「主プラン」は、遊び全体の流れを見た時に主のプランになっていると考えられるものとした。
- (2)「主プランから派生したプラン」は①の「主プラン」と関連をもつと考えられる「プラン」とした。
- (3)の「主プランから外れた遊び」は「主プラン」と「主プランから派生したプラン」が「プラン」

の内容が関連しているのに対して「主プランから外れた遊び」は遊びは独立性が高く、「主プラン」との関連が薄いものとして分析した。

(4) は遊びの流れの中での教師の援助を表す。

(5) 「プラン」前の数字は遊びが展開していく順番を表す

	主プラン	主プランから派生したプラン	主プランから外れた遊び	教師の援助
遊びの推移	2 「ピクニックに行く」 ・リュックを背負い 保育室とテラスを 行き来する	1 「弁当作り」 ・粘土を丸めて 弁当箱に詰める	3 「ペーパーサート作り」 ・小鳥をつくる	4 教師が小鳥のペーパーサートをもち「ピクニックに行くんですか?」と聞く
	5 「ピクニックに行く」 ・リュックを背負い テラスへ行く	6 「地図作り」 ・偶然目にした壁に貼ってある地図を見つけて書く 7 「地図をもって出かける」		

表の分析

・遊び全体としてはピクニックに行く、というイメージに沿って遊んでいると捉えられる。しかし、分析す

ると幼児の目に偶然入ったものにより「プラン」が派生していく。ただし、それは「主プラン」から離れたものではない。「主プラン」も存在したまま「派生したプラン」が出てくるのである。それは、表のなかの1. 6. 7である。

・この事例の場合は、「主プラン」から幼児が外れたときに教師が声をかけることで「主プラン」から「派生したプラン」に戻っている。例えば、3「ペーパーサートづくり」ではそれまでしていた、2「ピクニックに行く」というプランから外れて製作コーナーでペーパーサートづくりをする。しかし、そばにいた教師が作ったペーパーサートを手にして「Rちゃんおでかけですか?ピクニックですか?いってらっしゃい」と声をかけることで今までの遊びを思い出して、5「ピクニックに行く」という遊びの「主プラン」に戻るのである。

4. 考察

・一つのごっこ遊びをしても幼児はいろいろな動きをしていて一見、今までやっていた遊びから離れたように見える。しかし、「主プラン」は変わらないでそこから関連した「派生したプラン」が生まれている。「派生したプラン」を「主プラン」に取り入れて遊んでいる、というごっこ遊びの進行の仕方が新たな視点で分かった。

・ごっこ遊びを捉えるときの視点である「見立て」と「役割」で見るとこの事例には「役割」はない。この遊びを支えているのは「ピクニックに行く」という「プラン」と「見立て」である。今までの、「何かの役になってなりきった動きをするか、しないか」という「役割」の視点では「役割」がない今回のような事例は分析しにくい。このような事例の時には「プラン」という概念が特に意味をもってくるのである。

今後の課題

・「プラン」概念のごっこ遊びでの教師の援助を考える際の有効性を考える

引用文献

- 1) C. ガーヴェイ・高橋たまき訳「ごっこの構造」サイエンス社 1989年 p159
- 2) 同書 p134
- 注1) 小川博久編著 「遊びの探求」スペース新社 2001年
八木紘一郎編著 「ごっこ遊びの探求」新読売社 2002年